

リベルテール

10月号



Libertaire VoL.Ⅲ, No11

無政府主義者の機関紙

昭和四十五年九月
四日第三種郵便物認可

表紙のカットは大阪の津田君から送ってきたもの。大阪では一時版画が流行ったそうです。

目次

大杉とサンジカリズム	三浦精一	1
暴風雨の下の生死	武良二	13
思出の中の大杉		
戦後の思い出	杉藤二郎	15

大杉とサンジカリズム

社会主義的思想と労働者や農民の運動とは切りはなすことのできないものである。それは社会主義的思想は人間の自由、平等、友愛の理想にもとずいて、現在の社会に向けられる批判であり、労働者や農民の運動はそうした社会的抑圧に対する直接の抗議と要求だからである。したがって苦しんでいる階級の存在する限り、それはそれぞれの国で自然に発生するものである。日本でも徳川時代にこうした運動は百姓一揆として各地に起っており、理論的に追及して国家権力の否定にまで迫った安藤昌益もいる。

しかし現在われわれがふりかざしている無政府主義的思想も、その他の社会主義的思想もすべて輸入思想である。明治維新後の文明開化の波に乗って輸入された資本主義制度は、西洋で発生した同様な社会的矛盾を日本の社会にも起させた。こうした矛盾の下で自分たちを防御するための社会運動、こうした社会の在り方に対する批判は正の社会思想、いずれも西洋におけると同様に日本の社会に定着して行った。単に資本主義とその害悪を批判する社会思想のみでなく、日本は官庁構成、兵制、

三浦精一

学制、そして衣食住全般にわたって西洋に学んだ。明治、大正の日本は大きな革命的な変化を経験した。たとえそれが外形的変化だとしても、洋服を着て、頭をウェーブした今の青年男女が、徳川時代の江戸に現われたとしたら夷狭禽獣として一刀両断は間違いないだろう。

政治家たちは、物質文化は輸入しても精神文化は受け入れまいとして、昔シナ文化輸入時代にできた「和魂漢方」を「和魂洋才」におきかえて努力しても追いつくことではなかった。文化は複合体である。日本人を根本的に変えそうな宗教や社会思想だけは拒否したくても、そんな訳には行かない。

日本人はこのような経験を過去にも持っている。奈良時代前後のシナ文化採用期がそれで、「あをによし奈良の都は咲く花のにおうがごとく今さかりなり」の歌に象徴される奈良の都は、シナを模倣した条里制、ドギツイ赤と緑のシナ様式の建築、都大路を濶歩するシナ服の文化人のものだった。西洋式の高層建築のならぶ丸の内や銀座、そして洋服の日本人といった取り合わせは奈良時代の再現とも言えるだろう。天皇制が古事記や日本書紀

などとともて整備されて、日本人にとつてただ一つ「変
化させてはならないもの」といったイメージをつくり上
げたのも奈良時代前後の頃のことである。

西洋文化との接触は小規模ながら戦国時代から徳川時
代初期にかけて行われ、豪華な安土桃山文化の中に、そ
の影響が見られる。しかし、この時代に日本が直面した、
というよりも政治家が腹の底から恐れたのは切支丹だっ
た。それを名として鎖国を敢行した。鎖国の理由として
は、外国の奇品やシナの絹の輸入で多量の金銀が流出す
るために、鉾山を開港し、絹の国産を奨励し、貿易を長
崎一港にして幕府の経済的独占を策したとも考えられて
いる。いずれにせよ、唯一の存在である神の前に人間の
平等を説くキリスト教には、天皇、將軍、諸侯、士農工
商の階級社会の基礎が脅威されることは明白だった。ヨ
ーロッパではすでに権力と妥協していたキリスト教だっ
たが、無学文盲の農民が奉行の前で堂々と所信を表明し
て殉教して行くのを見て、幕府は慄然としたに違いない。
恐ろしいのは唯一存在に結合した庶民の精神である。そ
れに宣教師の往復は幕府の貿易独占にも影響なしではす
まない。

こうした鎖国が敢行できたのは、当時の日本の国力が
充実していて、切支丹断崖で西洋人宣教師たちを捕えて

も、また西洋諸国は宣教師を利用して日本侵略の野望を
持っていると言つても、それに抗議できる程西洋諸国は
強力ではなかったからである。日本が鎖国している間に
伸びた西洋諸国は、徳川末期から日本に開国を強要する
に至った。西洋の事情も分り、ついに開国して西洋文化
の輸入となった。天皇制を軸とした階級社会をつくり上
げて、徳川時代からの階級道徳を温存して、西洋式の外
形をとつた日本が生れた。

X

大杉は『労働運動の哲学』の序文で「僕は翻訳的社会
主義者と言われても、いやそうではないと大威張りに威
張ることできない、いかにも翻訳的社会主義者である。
僕の社会主義的知識や思想は、大部分西洋の社会主義や
社会主義運動を記した書物の翻訳である。原著者の各々
に対しては、往々かなり不忠実な、つぎはぎの翻訳で
ある。けれどもこの翻訳的知識や思想は、僕自身の、お
よび僕自身にもっとも近い周囲の事実の観察によつて僕
自身のものとなり、僕自身の中に生きて来る。……僕
自身の中に生きて来たのは、日本における労働運動の事
実の詳細なる観察によつてであつた。ことに、東京にお
ける労働運動史のほとんどすべてを、その生涯にアイデ
ンティファイした故野沢重吉君は、僕自身の中にこの翻

訳的労働運動の哲学Vを生かしてくれた、もっとも重
要なる一人物であつた」と書いている。

翻訳的社会主義者と言われても仕方がないと、あきら
めるのは、書籍を通じてしか知識を得られない僕たちに
も共通に言えることであるが、書籍にこだわらるか、それ
とも野沢重吉のような身をもつて運動に生きた者の中に
ある真実を認識するかによつて、その思想が単なる翻訳
であるか、身についたものであるかが分れてくるのだと
言うことができる。

しかし運動に生きた者は単に野沢重吉一人だけでなく
外にもある。大杉が野沢重吉の中に真実を見出して、そ
れによつて彼の労働運動の哲学を生命あるものにするこ
とが出来たというのは、築地の親爺と呼ばれたこの車夫
が、近所の夫婦喧嘩から、労働争議まで、あらゆること
を持込まれて、そのすべてに親切と勇氣をもつて尽した
し、東京のほとんどあらゆる労働争議に顔を出さないこ
ともなかったという人柄によるものだった。労働運動が
単なる賃上げでなく、社会悪に対する認識と挑戦を含む
以上、それは革命的意味を持たなければならないからだ。他
の労働運動屋が、組合運動はこうやるもんだといった常
識的ベテランとして幅を利かせる時に、貧しい野沢は、
労働者たちと共に泣き、怒り、そして戦つた。彼の中に

は生え抜きの労働者の正義があつても翻訳理論はなかつ
た。それが大杉を翻訳的社会主義から脱皮させた真実だ
つた。

X

大杉は『労働運動の精神』の中に、「したがって、賃
金の増加と労働時間の短縮とは、どこの国の労働者の間
にでも、かならずまず高調される。これが少くとも初期
の、労働運動の二大眼目なのである。しかし、労働者が
人間である限り、労働運動は決してこの生物的要求だけ
に止まるものではない。ただ多少楽に食つて行けさえす
ればいい、というのではない。それ以上に、もう少し進
んだ、ある人間的要求をもっている。労働運動のこの人
間的要求を見ることができないものには、労働運動の本
当の理解はできない。また労働者が自分の要求の中に、
この人間的要求をはっきり自覚しない間は、その労働運
動はついに本当の値打ちある労働運動に進むことはでき
ない。しからばその人間的要求とはなにか。僕はそれ
を僕等の心の中に見た。また多くの友人労働者の心の中
に見た。……僕等の窮迫に反比例する資本家の豪奢に
対する憤懣もある。彼等の無知や蒙昧や横暴に対する激
昂もある。しかし、それらの憤懣や激昂の奥底に、むし
ろ、それらのものを湧き立たせる源ではあるまいかと思

われる、もっと深い大きなあるもののあるのを感じる」と言い、「繰返して言う。労働運動は労働者の自己獲得運動、自主自治的生活獲得運動である。人間運動である。人格運動である」と結んでいる。だからこそ、労働者の解放は労働者自身の手で、という自主的運動が推進されるものである。こうした自主的運動だから、信者の如く行動しつつ、懷疑者の如く思索し、未知の未来に踏込んで行く人間の運動なのである。

×

こうした心構えをもって労働組合を考える大杉は、クロボキンが一労働者はまず、その建設しようとする将来社会についての、はっきりした観念を持たなければならぬ。この観念をしっかりとつかんでいない労働者は革命の道具にはなるが、その主人にはなることができない」と言ったことについて、「新社会組織についての観念、すなわち新社会の理想といったところで、まずどんな観念、どんな理想を持てばいいのかわからない。それには、労働者の目の前に、すでにいろんな見本ができている。無政府主義のそれもある、社会民主主義のそれもある。サンジカリズムもある。ギルド社会主義もある。・いずれも皆、それ相応に、もっともらしい理屈をもっている。・しかし人生は決してあらかじめ定めら

れた、すなわちちゃんと出来あがった一冊の本ではない。労働運動とはなんぞやという問題にしても、やはり同じことだ。労働問題は労働者にとつての人生問題だ。労働者は労働問題というこの白紙の大きな本の中に、その運動によって、一字一字、一行一行、一枚一枚づつ書き入れていくのだ。・無政府主義や、社会民主主義やサンジカリズムや、またはギルド社会主義等の、将来社会についての観念や理想は、あるいはヨーロッパやアメリカの労働者自身が築きあげて来た力や光であるかも知れない。彼等はその力と光との下に進むがいい。しかしその観念や理想は日本の労働者が今日まで築き上げて来た現実とは、まだ大分距離がある」と書いている。この認識は低度のものとの妥協を意味するものではない。クロボキンの言う「革命の主人」となることが、政治権力を握って民衆を指導する権力者としての労働者を意味せず、労働者として革命をいかに推進せねばならないかについての明確な認識をもって、革命の推進者になることであるように、大杉が認識する距離は、さらに築き続け築き上げねばならない距離である。権力主義者にとって

は、こうした距離があることが利用の可能性が大きいことを意味する、レーニンがロシア革命を成功させたのは、後進性を上手に利用したということであろう。

日本における後進性は徐々に成長したヨーロッパと逆のコースをとらねばならなかった。子供に大人の洋服を着せて早く大きくなれという無理を強行した。大杉が死んだころはまだその過程にあった。丸ノ内では、丸ビルが建築中で、新宿もまだ場末の町で、電車通りの遊廓は三丁目裏に移転していたが、伊勢丹は神田の松住町で小さな二階か三階建の店だった。銀座の松屋もまだ神田の今川橋で二階建、三越の本店も今の四分の一位だった。

労働者階級と言えは無知な下層階級と考えられ、多くはスラム街で裏長屋住いをしていて落語に出て来る熊さんや八さんそのまゝの程度に考えられていた。だからこの熊さんや八さんが組合をつくるなど飛んでもない話だと多くの人は考えるし、警察ではすぐ警戒し、弾圧する。大杉などはこうした熊さんや八さんを煽動する不逞漢だった。だから大杉自身が、日本の労働者が築き上げて来た現実とヨーロッパのそれとの間に距離があると考えたのも当然のことだったのである。したがって大杉の時代から戦い抜いて今日におよんでいるこの老人たちは、近所の夫婦喧嘩や生活の世話までやいて、皆で助け合った人々で、そうした生活を共に生きる運動が労働運動だった。輸入された資本主義制度の害悪をモロに浴びて、立ち上らずにはおられなくなって、皆で手を握って立上っ

た人々で輸入されたサンジカリズムによって組合をついたのではなかった。大杉たちが紹介したアナルシズムやサンジカリズムを知って、自分たちの自発的な運動との相似性を知った人々である。

×

今日では日本の資本主義は、その生産性において世界に誇る発展を示した。資本主義は利潤追求の原理において世界共通だから、勤勉なエコノミック・アニマルが優等生になった訳だ。しかし巨大な高層建築の内部で事務をとったり生産に従事する人々の精神構造までも輸入品という訳には行かない。徳川時代の階級道徳が忠君愛国思想を加味されて、そのまま通用して、タテ構造の階層制の強固な中軸となっている。このタテの構造を上に乗って行くのが立身出世の堅人であって、上れば上るほど、社会的な賞讃、信用、栄誉が得られる。大学を出ている方が出世のために条件が良かったために、大学は狭い門となり、産学協同といったように大学そのものが資本主義のために編成されるに至っている。

官庁や会社での階層制は徳川時代のように身分的に固定したのではなく、ピラミット型に制度として固定したもので、上昇するほど権限が集中する。下級の者は上級の者に封建的な服従が要求され、西洋の階層制と形式

は似ていても人間関係に差がある。だから堅実な思想の持主は、上長に対して犬馬の労を惜しまない封建的心性の持主である。

こうした心性の上に、大戦後政府がつくった労働組合法によって労働組合がつくられる。明日の出世を願う者たちの組合だ。当然会社組合になる。昨日までは平社員で組合の仕事をした者も、今日の辞令で係長になれば、大喜びで会社の管理職としての職務に忠実であろうとする。組合の事情も知っているからと重役も目をかけてくれる。賃上げ要求によって、たとえば平均一万円の要求が通ったとしても、実際の所得増は給料の額に按分されるリストに参加しなかった管理職員にも配分されることになって、高給者は一万数千円になっても薄給者は五千円にもならないようなことになる。薄給者は高給者のために戦ったような結果になる。これが革命的組合の階級闘争だろうか。それでも明日の出世のためにはだまって精勤するのが堅実な人だと言われるのだ。

×

組合活動は革命的組合でも御用組合でも、その闘争には限界があつて改良的闘争から一步も出られないのが現実である。資本主義という枠組の中の闘争だからである。この枠組を破壊することが革命的だと知っても、それは

組合の自爆につながる。たとえ組合が会社や工場の管理権を握っても、社会が資本主義的に組織されている限りその中で社会主義的経営を実施することは不可能に近い。

マルクスの時代の労働者は悲惨だった。そして大企業に資本が集中して、中小企業も悲惨な労働大衆の中に落ちこんで、この労働者階級が資本家階級に対立する。この階級闘争による革命はまず資本主義的先進国であるイギリスに起るだろうと、マルクスは考えた。しかし賢明な資本家は、労働者の要求に譲歩して労働者階級の生活は向上した。革命は避けられた。ケインズなどはマルクスの予想した経済的革命的革命は血を流さなくても資本主義的にやれるのだと笑っている。資本主義的に未熟だったロシアで革命を起しても、アメリカに追いつき追い越すために生産力を充実させねば、社会主義革命は成就しないと大童になっている。この社会主義革命は無政府社会になることだとレーニンもスターリンも考えている。このために一階級は無くなった」と称する彼等の社会には強固な階層組織がつくられている。階層と階級はどう違うのか。ロシアの階層制はアメリカよりも激しい。

×

大杉は、毎月一日と十五日に小石川指谷町の渡辺宅で開かれていた東京労働同盟会の例会で、岩佐作太郎が

「組合運動か革命運動か」という問題を提出したことを書いている。これは堺利彦や荒畑寒村の中央集権的な考え方に対してのものである。これについて大杉は「岩佐君の八組合運動か革命運動か」は、要するに、この中央集権説の反駁であり、同時にまた労働組合の必然的自主自治的発達説に対する疑惑である。岩佐君はこの疑惑を誇張した。労働組合はその性質上、自主自治的の革命的 정신を持ち得ないものだ。徹頭徹尾、専攻的、中央集権的性質のものだ、とまで極論した。しかし、それが単なる誇張であつたために、その理由の説明ははなはしく明白を欠いた。この誇張を除けば、僕は岩佐君の労働組合疑惑説にも、中央集権反対説にも、ほとんどまったく同意する」と言ひ、「労働組合運動は、それ自身の中に、また一般社会の中に、なんらかの建設的傾向を確立してゆく一大方法である」と言っている。

この岩佐老人の言葉は、大杉が言うように誇張されているかも知れないが、実に手酷しい言葉である。かつて無政府主義者はこう答える中で「この労働者階級はもと資本主義制度の掠奪、搾取を助長し、完成させるために出現した階級であるから、その本質上、資本家階級とともに資本主義部落を構成するものであることは、なおかの警察官吏が階級的地位から言えば労働者であり

ながら、厳として政府の一部を構成しているものである」と同一論理にあたっているのである。こいささか極端な例ではあるが、かの山本に立てこもっている山賊の親分と子分との関係にも似かよっている」と言つて物議をかもししたが、この疑惑も同様な考え方である。この「無政府主義者はこう答える」は序文にもある通り、大杉にすめられて岩佐老人が訳したものだから、この言葉はジョージ・バレットの言葉であり、大杉もこれに同感していると考へねばならない。労働組合運動には、このバレットのように、ヨーロッパのアナルシストたちも疑問を持つものが多かった。アナルシストが労働組合で活動するとき、組合の日常要求の運動に埋没して、アナルシズムの革命理念を見失つて逸脱するのを眼前に見るからである。そればかりでなく個人の自主、自律を主張するアナルシストが、組合という組織の中で、どのように行動するかにも問題があつた。労働運動は改良主義で革命の手段となり得ないと考へたセバスチャン・フォールは労働組合に加入する労働者は「革命の最悪の敵だ」とまで極論した。

マラテスタは革命的サンジカリズムを長足の進歩を遂げたものではあつても、それ自身の中に過去の労働運動を墮落させた一切の要素を温存していると言ひ、サンジ

カリズムの発達が、ただちにアナリズムの実現になるように想像してはならないと警告している。しかし、このマラテスタは、民衆の大多数を今日の卑屈な境遇から立ち上らせ、アナリズムの概念とその実行の希望を持たせるためには、単なる宣伝だけでなく、日常生活の事実から学ぶことが、最も有効だから、進んで民衆の實際生活に参与せねばならない。このために労働運動は第一だ。と語る人でもある。セバスチャン・フォールも岩佐老人も、マラテスタと同様労働者と共に戦った人々だった。岩佐老人も同じ文章の終を「階級闘争という文学や言葉に迷わされてはならない。その意義を明確につかまえてはならない。革命的労働運動、農民運動はしばらくも閑却してはならない。彼等の階級闘争は、彼等の革命的覚醒を喚起する最大の要因だからである」と結んでいるのである。

世の人々は、その人間を理解しようとはしないで、言葉尻をつかまえてその人にレッテルを貼ることが好きだ。岩佐の山族論というのもこの種類のレッテルだ。政治屋はこうした揚足取りをして文意を歪曲して恥じない。

かつてフランスのサンジカリストたちはゼネラル・ストライキの夢に心を燃やした。それが労働者に革命への希望を湧き立たせて、組合は革命的になった。改良的な

要求に過ぎない八時間労働制の獲得にも、血を流して戦った。ゼネラル・ストライキは見果てぬ夢であっても、それによって日常闘争に革命の火が燃えた。サンジカリズムにおけるアナリストの役割は、それを日常闘争にのみ埋没させまいとすることにあつた。岩佐老人が労働者階級について、資本家階級とともに資本主義部落を形成するものだというパレットの言葉をあえて訳したのも、マラテスタが労働組合の中に墮落の要因を見るのも、セバスチャン・フォールが組合加入者を革命の敵だということも、人間の弱さを知るアナリストとして当然だと考えられる。この三人とも労働者とともに戦った人々で、私は岩佐老人には好感を持っていなかったが、老人の死を知ったかつての労働者の同志たちが深い雪をふみ分けて、その死の床にかけつけて野辺の送りを済ませた話を聞いた時、没落の底にあえいでいた当時のアナリストの運動の中に見る、こうした美しい事実、一そこには岩佐老人の中に必ず何かがなくてはならない」と思った。老人のものを読んで見ようと思ったのはそれからだった。政治家どもに躍らされ、同志の欠点を攻撃し、暴力や政権の獲得を革命と錯覚するのでなく、内なる自我を見つめ、その魂の聲に耳をかたむけ、革命の灯をともしようとする人であつたら、岩佐老人、マラテスタ、フォール

たちの言葉を噛みしめずにはいられないだろう。大杉は労働者の運動を、人間の運動、人格の運動として捕えていることは前述した通りである。われわれが人に見る欠点は、われわれ自身も共有している欠点なのだ。

こうした欠点を持つ個でありながら、群居動物として集団せずにはいられないのが人間の宿命であり、集団することによって、個には不可能なこともできる。集団することによって個が圧迫される。集団することによって個の欠点が集団の欠点に拡大される。経済的目的によって結合する労働組合も決して経済的にのみ活動する訳はない。経済的活動だけと誤解するから改良的に墮せずには居ないのだ。革命は資本主義的に成熟したイギリスで、まず起ると考えたマルクスも、人間とその運動を経済的にのみ考えたのであり、当然唯物的宿命観になつてしまった。大杉が考えたように、それを人間の運動と考えるとき、労働組合運動も生命的、革命的になることができる。

アナリズムについて質問した私に、石川さんは「偏見を持たないことだ」と答えた。これ以上の至難な道はない。アナリストの道は偏見をすてて人間自体を追及するにある。この石川さんもサンジカリズムの紹介者の一人であつた。組合運動を革命的にしなければならぬ

と考えるからこそ、フォールのような逆説も生れる。

ジャン・グラウは「労働者の要求は準備されつつある革命の主要な基礎をなす。さらに労働者大衆との結合なしに革命を行なおうと考えるのは馬鹿げたことであろう」と言っている。労働者ジャン・グラウを愛して、その文章を直し直して人並の文章が書けるようにしたのは、クロボトキンとエリゼ・ルクリュだった。その文章の中にはクロボトキンやルクリュの愛情がかくれている。クロボトキンがあるときは労働運動を否定し、ある時は肯定したというのは、そのどちらも正しいのだ。肯定すべき理想に向って進みながら、否定せずには居られない姿を見せるのは人間とその形成する集団ではないか。

×

大杉はサンジカリズムを他の思想とともに輸入されたものとしているが、この輸入思想に対する彼の態度は、マルクス主義者たちが輸入マルクス主義を教条として、一言一句に細心の注意を払い、それから逸脱しまいとするような態度とは全然ちがうことである。こうした態度は教条主義で一種の偶像礼拝である。教条主義という言葉は中央集権主義者、ことにマルクス主義者の間でよく使われる。自分の教条主義を棚に上げて相手を攻撃するのである。この教条主義は中共でも採用され皆を毛沢東

語録の教条で画一的に教導しており、おまけに毛沢東の写真や像まで用いている。ただその前で形式的に跪まずかないだけで。こうしたことは中央集権主義にはつきもので、ロシアでもブレジネフの旗色がよくなった時に、ある地方の代表者は演説の中で数十回もブレジネフの名をあげて忠誠を表明したとも伝えられる。中央集権主義はこうした人間の弱点の上に立つものである。

子供を失ったある婦人が路傍のお地藏さんに、よだれかけをかけて手を合わせる行為は形式的には偶像礼拝かも知れないが、これによってしか表現できない死んだ子供への愛であり、連帯である。死んだ山鹿君の家に行った時、大助君の写真の前に供え物がしてあった。この奥さんの子供への愛情を、あの唯物主義者の山鹿君はだまって見ていたのだ。こうして人間の社会は死者と共に形成されているのだ。三百年の信仰を守り抜いて殉教を恐れなかった切支丹は、一つの存在に結合して国家権力も恐れなかった。彼等は眼に見えない存在との連帯の組織に生きていた。こうした庶民や労働者は形式的に偶像の世界に生きていくようにでも、愛情と真実によって連帯しているのである。支配欲、権力欲にしがみつく中央集権主義者の教条的偶像礼拝とは根本的に違うのだ。アナリストは庶民の中にこの「無知の知」を見出すのである。

大杉自身もよく無知な労働者という言葉を使うが、彼はこの無知な労働者の中から自発的に生み出されねばならないものを労働者と共に生み出そうとする。中央集権主義者のように労働者は無知だから、煽動し、指導し、権力に従わせて、革命政府をつくり上げようとするのは根本的に違うのである。彼はサンジカリズムがフランスである時期にアナリズムの要素に影響されて形成された、労働組合運動の主張であることを、よく理解して日本のその頃の社会事情に照らして研究しようとしているのである。そのサンジカリズム研究会が出来たのは一九一三年の七月で、水沼辰夫君たちが欧友会をつくったのは、それよりも五年前の一九〇七年四月である。

労働組合結成の動きはすでに一八九七年頃の労働組合期成会を母胎として鉄工組合や鉄道矯正会が生れ、活版工組合も生みの苦しみを重ねながら結成されたのは一八九九年だった。これが六ヶ月しか続かず、水沼君たちが自発的に欧友会を結成し、それが一九一六年にできた信友会に続くのである。

欧友会が純粹の労働者だけの組合としてつくられたことは日本の労働運動史上劃期的なことと、それまでの組合はすべて有名人を上についたばかり天降りのものだったのである。この頃の社会主義者のグループは色々な思想

傾向の者の寄合世帯で、幸徳がアメリカから帰ってアナリズムへの転向を声明したのは一九〇六年六月である。アメリカのIWWが結成されたのは一九〇五年、フランスでアミアン綱領が発表されたのは一九〇六年である。

日本で一般にアナリスト系の組合はアナルコ・サンジカリズムの思想の影響でつくられたもののように言われているが、これは大きな誤りである。アメリカで労働者たちが自発的に結成したIWWも、決してサンジカリズムの影響によってできたものではない。個人の自主、自由、自発を主張する労働者たちが手をつなぐ時に現われた形式が似ているというだけである。日本の欧友会も自主的におたがいの助け合いを主張して生れている。あるいは一九〇六年の幸徳の直接行動論を聞いた者も、その中に居たかも知れないが、決して輸入されたサンジカリズム思想によってつくられたものではない。大河内一男の「黎明期の日本労働運動」に書かれているように、幸徳の帰朝報告について「サンジカリストとしてしゃべっている」といった表現は、安藤昌益もアナリストだというのと同様に、別に差支えないことだ。僕もこうした使い方をする。しかし、発生的に歴史をあつかわねばならない時には、ある区別も必要である。欧友会や信友会がサンジカリズムという輸入思想によってつくられた

ものでなく、労働者によって自発的につくられたというのはこの意味である。

大杉は「個人主義者と政治運動」(一九一五)の中で「僕のここに紹介しようとするサンジカリズムは……無知なる労働者の日常生活の間に、その日々の資本家との闘争の間に、ほとんど自然的に出来上った運動である。理論である。もともと、サンジカリズムは、その長い行程の間に、無政府主義の影響を受けているが、しかし同時にまた他のあらゆる社会的学説の影響をも受けている。けれどもサンジカリズムは、その影響によって形成されたというよりも、むしろ労働者がただ生きんとする本能にかられて、あるいは右に行き、あるいは左に行き、あるいは進み、あるいは退き、ついに彼等の生活そのものの自覚と経験とから、不断の流転を経て創造されたものである。彼等は最初から理想をもたなかった。また定まった運動方法をもたなかった。もとよりなら社会学説などを持ってはいようはずもない。彼等はただ盲滅法に、その目前の死からのがれんために、さらによりよく生きんがために、彼等の能うだけの全力をつくした。かくして彼等が幾多の肉と血と骨とをもつて築き上げて来たこのサンジカリズムは、ついにかの無政府主義と一致して、偶然にも後者の抽象的理論を漸次に具体化せしめ、そし

て後者の架空的なる理想を漸次に事実化せしめた。ここにサンジカリズムの非常な面白味があるのである」と言っている。そしてさらに、生活困難に迫られて、相寄り相助ける互助組合から、闘争の組織となり、その闘争の過程において、生の本能に生きる外ない自身を発見し、「彼自身が新人として個人的に完成されつつあるとともに、彼等の団体もまた、新しい社会生活の萌芽として発達して来た」―サンジカリズムは不断の創造の行政にあるものである。・・・サンジカリズムは今日の経済制度をその根本において否認するとともに、また今日の政治制度をその根本において否認する。そして彼等は、無政府主義者と一致して、共産と連合との新制度を理想とする」と書いている。

この論文が書かれた一九一五年はまだ第一次大戦の続いている頃であった。一九二二年十二月の労働運動に出た「無政府主義と組織」の終りの方に「無政府主義は、紀律、恐怖、刑罰、および貧困の圧迫なき組織の可能性を肯定するものである。それは生存のための恐るべき闘争を終結せしめる新しい社会組織である。・・・かくのごとき組織の萌芽は、ある労働組合の中に発見し得られる。この労働組合は、中央集権主義と官僚政治と紀律とを廃止せしめ、その各組合員の独立的直接行動を助長さ

せている。」と書いているから、労働組合に關しての考え方は最後まで変っていないと思われる。

アミアン綱領が発表されたのは一九〇六年で、フランスのサンジカリズム運動が興隆期から、第一次世界大戦の試練期に入った頃に大杉は世を去った。しかし、大杉がサンジカリズム運動を人間の運動として捕えた視点は今も正しい捕え方である。そしてそれはどこまでもアナリスストとしての捕え方である。岩佐老人もマラテスタもセバスチャン・フォールもアナリスストとして正しく発言した。クロボトキンが言うように「現存する資本主義の搾取ならびに国家に代って、生産、交換、分配を労働者の組織によって占有しなければならぬ。そして社会の新しい形式を作り出すことは、労働者の組織の義務であり、課題である」と言ったブルードンの思想の発展である。そしてそれは人間が生活の問題や、近所の夫婦喧嘩の仲裁から、職場での組合の問題まで、おたがいの身体を寄せ合って試行錯誤しつつ展開させて行く運動を基礎とする思想で、それが人間の内奥に深く、その実存をふまえようとするアナリズムに反応する思想である。フランスにおいても今はサンジカリズムはマルクス主義的に逸脱して、アナルコ・サンジカリズムも昔日の面影はない。これはアナリスストもサンジカリストも人間そ

のものを忘れて、唯物的に経済的動物としてのみ考えて来た結果であろう。人間復興としての新しいルネッサンスが叫ばれるとともにアナリズムは復活しつつある。

暴風雨の下の生死・思出の中の大杉

武 良 二

大正七年（一九一八）の米騒動の余波を受けて、ようやく社会問題がやかましくなった時、それに応じるように大杉等の社会問題講演会があることを新聞で知った。

銀座の教寄屋橋のたもと二階建の寄席だったが、鹿児島から上京して水道橋の齒科医専（今の東京歯科大学）に通っていた僕は、早速講演会に出かけることにした。

会場に行くと見ると会場は警察官に固められていた。講演会はずいぶん解散になったが屋外では警官と大杉等の間に小ぜり合いが初まった。この時代に誠に珍らしい出来事だと思った。初めて警官に立向って争っている人々を見て痛快で意を強うしたのだった。というのは郷里にいたとき、町の有志や巡査といざこざを起して、気の強い子だと別人扱いされて、親たちを困らせていたからだ。この騒ぎを見た私は、同じような気持の人もあるもののだと思った。思想的には知ってはいなくても、今さらながら自分というものを見直さずには居られなかった。権威に対

人間をその深層まで掘下げて、アナリズムを見出さねばならない。アナリズムは不死鳥である。

する反抗心は強い弱いはあっても、誰でもが心の底に持っているものではないか。

その騒ぎの中に、いつの間にか巻きこまれて、とうとう警視庁の監房に一晚とめられた。この時が大杉との初めての出会いだった。

それからずっと経って、大杉がフランスから帰って、四、五日した頃だと思うが、私は駒込の労働運動社を訪ねた。大杉の話聞くためでもあったが、翌日は僕が既決囚として中野監獄に入らねばならなかったので、そのお別れにという意味もあった。

その事件というのは、当時の堺真柄さんや、この会場にも見えていられると思う中曾根貞代さんたちの赤瀾会のメンバーも加わって、その頃演習のため代々木の民家に駐留宿泊していた幹部級の軍人に対して、反軍的内容の慰問状を送ったのが大問題となり、逮捕・未決・既決となつて年貢を納めねばならなかった訳だ。それという

のも当時労働運動社にロシアから帰ったばかりの近藤栄三（伊井敬）が居て、この男が軍人に送った文書を不用意にも机の抽出しに入れて居たために、特高警察につきつめられ、白状してしまったので皆がつかまることになったのだった。大杉は労働運動社には近藤が二人いるが一人はバカコン（近藤栄三・伊井敬のこと）だと言っていた。大杉に会って翌日中野に下獄した。

九月一日の大震災は入獄中の事で、正午の食事が済むか済まないかという時刻だった。監房もこわれて皆中庭に出された。ところが意外にも、そこには顔見知りの同志も居た。近頃顔が見えないなと思っていれば、不敬罪でやられたという。どこへ行っても、そう淋しいものではないなと思った。一緒に中庭に出されていた他の囚人等が好意をよせているのか、あるいは頼りにしているのか、いろいろ言い寄って来るのだった。しかしこの際どんな言いがかりをつけられないとも限らないので、それには用心していた。やがてまた元の監房に帰された。

九月十六日の昼頃、監房はいつになく静まりかえっていた。雑役の足音も絶えて、なにか鞭の音や人のうなり声が聞えてくるようだった。何かやっているな、と思った。するとやがて僕の房の戸を荒荒しく開けて、「出る」という。いよいよ来たかなと思った。

牢は中央に事務所があって三方に見通しが良くように延びている。一方の両側に房がずらりと並んでいる。僕はその中央の事務所引っぱり出された。二階から縄が垂れていた。「そこに坐れ。お前は囚人を煽動したな」と言って、手を後ろにまわし、縄を胸の方にかけて、縛り上げて吊した。そしてブチで叩く。さらに水をぶっかける。人間にブチをかけた音を初めて聞いた。まったく狂気の沙汰だ。それから吊り上げた足を下につけると言う。意識が失われていくのをかすかに感じていた。早く意識を失った方が良いと思ひ、わざと足を上げた。頭がぐくりと落ちるようになつた。もう絶息したのか。それにしても廊下を駆け足で走る音がかすかに聞えた。医務局に行つたのか。吊し縄から下されたのか判らなかつた。意識不明で、びしょ濡れのままで房に運ばれていた。もちろん食事どころではなく、そのまま夜になった。

不思議なことが起つた。夢ともつかず、うつともつかぬ中に、まさまざと大杉と野枝が子供を真中にして、僕の足もとに立っているのである。はてな、おかしいこともあればあるものだと思つた。これに理屈をつけようなどとはさらさら思わない。ただこうしたことがあつたと、僕は言うだけだ。

それから監獄の方も落付を取戻し、五日ほどして妻の

青木が中野まで面会に来てくれた。四谷から中野まで歩いて来たということである。よく来てくれた。彼女は、外では大変なことが起っていると、少し間を置いて、僕の顔を見ながら、大杉さんと野枝さんがやられたと言つて、うつむくのだった。僕はただ「そうか」と言つただけで、それ以上言う言葉もなかつた。そして彼女の帰りを道心配せずには居られなかつた。

大杉とは警視庁の監房で初めて会い、中野監獄でまぼろしの別れをしたということになる。人間の一生には、変化のあるいろいろのことが起るものだ。

共産党吉隈細胞との戦い

戦後の思い出 151

杉 藤 二 郎

学校設立などで私の評判が良くなるにつれ、共産党細胞（吉隈細胞二百人位の勢力）の連中は、私が少しむたくなり、私の追い出し策を構じ出した。それは、麻生連合の組合長に祭り上げようと言うのだ。麻生連合は、同一資本の麻生の鉱業所、赤坂坑、山内坑、上三緒坑、豆田坑、久原坑（佐賀）丘下坑（長崎）それに吉隈坑の七坑と、芳雄製工所（炭坑用具を作る工場）本社従業員組合、の二職場を総括した上部組織である。間近かに迫

中野監獄を出て、間もなく大杉の追悼会だった。追悼会の日朝、大杉の遺骨は暴漢に持ち去られて、遺骨なしの追悼会だった。しかし遺骨の有無は大して問題ではないようだった。皆は二階にも集っていたが、延島君が会場には憲兵隊が機銃を備えつけるそうだと言う。誰かがピストルには弾が入っているか、頭脳には思想があると言っていた。

あの頃は皆が異状な状態におかれていた。追悼会に参起人として名をつらねていたのは15名位だと思ひが、生き残っているのは、もう三人位でしかない。

りつゝあつた連合会の選挙に臨み、各炭坑各職場に居る共産黨員をして、フラク活動を起し、私を吉隈から連合体へ送り込むことは、彼らの大義名分も立つという処だったろう。私は山を離れる意志もなかつたし、その手には乗るまいと心に決めてもいた。杉藤が連合組合長になるらしいと噂が立ち出した時、稲見榊男が和田尊を伴つて私の処へやって来て「決して山を離れてはいかん。今吉隈から君がはなれたら折角これまで頑張った君の努力